

## 海外林業研究会々員の広場

### 嫌われても国際協力（2） 捨て植え試験

「植栽試験ですか？ でも計画しているプロジェクトは3年間ですよ。木を植えて何になるんですか？ よくて1年目の途中に植えることができたとしても3年目の終わりに報告書を出すなら、植えてから2年のデータしか使えませんよ。ちょっと文献を調べたらわかることですけど、植えてから2年のデータなんて山ほどありますよ。だいたい、プロジェクトのあと試験地をどうするつもりですか？」

熱帯での植栽試験に関する論文を探してみると、植栽後5年目まで追跡した研究報告はあまり無く、10年継続したものはほとんど無いことに気づきます。私は、植えて数年しか追跡できないような植栽試験を、『捨て植え試験』と呼んでいます。私を含めて外国人が熱帯に入って『捨て植え試験』を繰り返した結果、現地の研究者も『捨て植え試験』に走りがちな傾向があります。たとえばフタバガキ樹種なら伐採可能になるまでに植えてから30年くらいはかかります。研究プロジェクトを含め各種植栽試験については、真剣に考え直す必要があります。なぜなら、この種の植栽地は次のような問題を抱えているからです。

- ★ 植栽後、数年たつとプロジェクトが終了し追跡できない。
- ★ 試験設定を複雑にしすぎて、実用性のある成果を出せない。
- ★ 収穫を前提としていないので、維持管理のための費用がなく、試験地を維持できない。

以上のようなことに陥ったのは、熱帯林修復の技術研究が熱帯林の樹種多様性に甘えてきたからです。つまり、「熱帯林は多様だから……熱帯林の修復のためには多様な樹種を植えなければならない。そのためには、可能な限り多くの樹種の特性を知っておく必要がある。」を盾にすれば、手に入る種類を組み合わせることで植えて測るという作業を繰り返すことができたのです。その結果

- ☆ ほとんどのかなりの樹種について基本的な造林特性が明らかになった。
- ★ 種子や苗木を得やすい樹種に対する試験が繰り返された。

熱帯では、産業目的の造林が実施されています。また荒廃した森林地域への修復造林も大面積で実施されています。特定の利用目的に使われる樹種も植栽されるべき土地も、そして大多数の樹種の基本的な特性もすでに明らかにされ

ています。熱帯林の修復のために必要な研究とは、ちまちました『捨て植え試験』ではなく、造林事業者と密な連携をとった、現場対応型の研究です。たまたま手に入った樹種の苗木を使って『捨て植え試験』を繰り返している場合ではありません。

現場にはりついて植栽地を管理している人たちの本音を聞けるとしたら、「植栽試験をするというなら、最後まで面倒見ろ。」、「新しく植えるよりも、自分で植えたところを維持管理してみろ。」、「植えて遊ぶだけなら、もう植えるんじゃない。」となるはずです。

このようなことを言うと「植えるのが好きな人たち」に嫌われるかもしれないけれど、これで『捨て植え試験』を思いとどまる方が一人でもいれば、それはそれで国際協力と信じます。 (藤間 剛 CIFOR 研究員)

この欄にふさわしい会員の方々のご意見、感想などを広く募集しております。また、記載された記事に対して、質問やコメントのある方は編集部までお知らせ下さい。必要とあれば匿名にても筆者に連絡します。

(編集部)